

## 晩年の大妻学校創設者の想い

### — 資料調査研究報告 (1) —

Kotaka's later years  
— Research report (1) —

真家 和生<sup>1</sup>, 鳴瀬 麻子<sup>1</sup>, 吉田 光浩<sup>2</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学博物館

<sup>2</sup>大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科

Kazuo Maie<sup>1</sup>, Asako Naruse<sup>1</sup>, and Mitsuhiro Yoshida<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Otsuma Women's University Museum

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

<sup>2</sup>Department of Communication and Culture, Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：大妻コタカ，コタカの晩年，日記

Key words : Otsuma Kotaka, Kotaka's later years, Diary

#### 抄録

本研究の目的は、博物館が行っている大妻コタカ研究の一環として行うものであり、大妻コタカの晩年の生活や想いがどのようなものであったかを、博物館収蔵資料を元に辿ってゆこうとするものである。博物館には「心の泉」と題されている冊子2冊が資料としてあり、ここにコタカの晩年の生活が記されている。本研究の当初の目的は、ここに記されている内容を解読し、晩年のコタカの日常や交友関係、また思想などやとくに女子教育に関する思いなどが綴られているかどうかを確認することであった。しかしコタカの筆跡は決して読み易くはなく、また人名なども省略されて記されているものも多く、すべてが判読されたという状況ではない。また、この記録の性格上、現在ご存命の方のお名前も登場するなどの理由もあり、この報告書に具体的内容を記すことができないことを予め断っておく必要がある。本報告では、この資料に記されている具体的内容ではなく、可能な範囲での概要を整理し報告するに留める。

#### 1. 本研究の基本的性格

大妻女子大学博物館では、大妻コタカ研究の一環として、博物館に収蔵されているさまざまな資料の時期や内容の付き合い合わせ作業を行っている。本資料はその中の一つであり、「心の泉」と背表紙に題字された2冊の冊子体資料である。本資料には本学創設者である大妻コタカの最晩年の生活と人間関係が記録されており、その意味で本研究はコタカの最晩年の生活調査としての性格を有している。

#### 2. 本資料の基本的性格と記載概要

本資料は大妻コタカの最晩年の日記である。一部代筆と思われる箇所もあるが、大半はコタカ自

身の筆跡である。従ってコタカの筆跡（書き癖やコタカ独自の略字など）やコタカからの各個人の呼び名などについての資料となっている。本資料の書き出しは以下のようにになっている。（漢字や句読点など、できる限り原典に忠実に記している）

『この書 心の泉は昭和四十年十月二十四日の日曜日晴天に 大妻女子大学の二部「夜間」の学生が秋の体育祭をして その記念に 出席者全員に贈ったもので 机の上に置いて「夜の学生は晝間の諸所への勤務している人が多いから こういうことに気がつくのだ」と感心した プラチナシャープペンシルも共に贈られたので記念に そのペンシルで書いている。少し薄いので字を大きくする この心の泉を使う心になったのは 側で見

ていた大和田昭子さん「現在大妻短大二年生で私の家に起居して私の身の周囲のことをしてくれながら晝間勉強」が「お母様も之れにお書きなさい」とニコニコしながら言ったので書く気持ちになった。果たしてどれだけ書けるか、續けてみたいものである』

そして最後は、昭和42年10月31日で終わっているが、後半は以下に示すように、日付のみ、あるいは日付の下に1行あるいは数文字のみの記載となっている。

十月二十三日 佐藤さん 亀戸へ  
ミチさんかえる  
十月二十四日 五 六 七日  
十月二十八日 人を招待  
十月二十九日  
十月三十日 中川結婚式 土肥さんと行く  
十月三十一日 吉田氏の国葬招待状は来たけれど足が痛いで行かぬ

すなわち、本資料はコタカ最晩年の昭和40年10月から昭和42年の10月までの記録である。

この中に記載されている基本的内容は、その日にあった出来事を忘備録的に記載したもの、面会者、金銭的記録など、また晩年の健康に関する内容が主であり、当初期待したような女子教育に関する思想的内容はほとんど記されていない。但し、神仏に対する敬虔な思いに関しては随所に記載があるが、コタカ個人の信心に関するものでこの中には記載しない。

以下、人名等の記載のない数箇所を例示する。括弧書きは著者による注である。

四十年 十月二十六日 晴  
朝、洗髪、部長会 米川医院へ、  
肉あんのまん十を地下で賣り利益があつたら  
同窓会の収入とすること

(昭和40年) 十一月十八日 晴  
波田野さん結婚式に三條苑、高山へ  
石根さん自然薯を持参  
胸像のための写真 <二千元>  
小田さん 石岡さん

(この「胸像のための写真」とは、胸像を作るための立体写真を撮ることであると考えられる。この胸像が、現在、図書館棟やE棟一階に設置され

ているものと思われる。)

十二月三十一日 好天気 晴 金  
いよいよ四十年の最終日  
有りがとうございました  
明治神宮へ  
お供料一万円参拝の人に托す

昭和四十一年 元旦 土 晴  
日本晴れのよい天気で七時起床  
身体を整えて八時お二階九人  
男二人女二人 土肥、私  
山崎、春日の十七人でお祝膳、  
九時十分式  
九時半発、日枝神社、皇居前、比川神社  
(氷川の誤りか?)  
浅草勸音様、寄宿舎、亀岡八幡宮  
靖国神社参拝  
長岡夫婦、泉良子三人、奥山三人来、  
内藤誉三郎氏来、

四月一日 金 朝雨 夕方上る  
酒を日枝神社、浅草寺、靖国神社  
亀岡八幡宮 合計四本奉納 四月新学期  
をむかえ得た御礼  
大妻神社氏子総代が変って知らせあり

三月迄の人  
大林喜内、逸見進、太田薫、本間熊八郎、  
降旗由春、青木武春、  
青木(関?一字不明)一、  
青木俊夫、降旗喜好、以上九名  
新任総代名  
新 中沢辰雄、再 本間熊八郎、新 神沢速水、  
再 青木武春、再 青木俊夫、再 降旗喜好、  
新 村松宗重  
新 逸見陸衛、  
新 田多井(梅?一字不明)雄一

七月七日 雨 木  
フリヒメ様の御祝いで上田へ行く  
夜九時から家で祝いをする  
(この「上田」は上田商店のこと)

十月二十日  
中高の体育会 風なく晴天  
実によい日

けが人もなく病人もなく  
父兄は満員  
十二月一日  
朝礼 理想は高遠に実行は足もとから  
氏神様 皇居前 沢さんをさそい浅草へ、  
上田商店へ  
沢さんを送り靖国神社へ 帰る

十二月三十一日  
洗髪パーマ

四十二年一月一日 雨  
八時朝食お二階五名家の子男子二人女二人  
寿美子さん土肥先生大妻  
八時半十一教室で式 九時発日枝神社、  
宮城前 浅草、大宮、三千円を屋根ふき替にキフ  
宿舎、熊田先生宅 亀岡八幡、靖国神社

三月十七日  
お墓参り、雇員 土産 白倉お参り  
(校主の命日)

四月二日  
ジューキ編物の卒業式  
七十七の祝の着物にキッコの帯  
夜桜見に一同で

六月二十一日  
私の生まれた日 一日休む レントゲン  
血をとる  
(コタカの誕生日)

### 3. 晩年のコタカの生活信条

本資料の最後に、コタカはその生活信条ともいえる言葉(成句)を記している。晩年のコタカが生涯にわたって培ってきたコタカの生活哲学である。大妻に奉職する大妻人として心に刻まなければならない言葉である。最後にこれを記す。(ママ)としたのは原文のままの意味。

ゆるす者はゆるす 心常に平なり  
正直は最良の改策なり  
正直の頭に神やどる  
今日なしうる事を翌日にのぼすな  
今日努力次第は明日をどの様にも変るのである  
反省は災禍を予防す

行為は言葉よりも貴い  
己をせめて人をせめるな  
自らの思慮判断する知力をそなえよ  
心常にたのしければ顔美しく肉体若し  
毎日だれかに一つでも親切にしよう  
人は信仰がかたければ一人で居ても一人ではない  
先ずれば人を制しおくれれば人に制される  
熱しやすき者はさめやすし  
二度と同じ失敗をくり返すな  
児童は父母の行為昭映する鏡  
嫁入りのその日の心忘れずば婿や舅に嫌われはせず  
使われて骨が折れると思うなよ他人ではなし内なりけり  
明日より今日を大事にかざらないのが一番美しい  
良心は法律より尊い  
身近な事からやり始める  
難病いなき身に病いつつしめ  
ふまれてもふまれてもなお花咲いている  
仕事を追い仕事に追れるな  
自信は成功の第一歩  
幸せの花をつむより種を蒔け  
信じて行なえば必らず成る  
物はこれをいかす人に集る  
思は石に刻めうらみは水に流せ  
多く聞いて少なく話せ  
若い世代の前には偉大な未来がある  
敬天愛人  
すべてを感謝し常に喜ぶ  
親思う心にまさる親心  
人各々長ずるところあり  
腹がたったら明日まで待て  
親切は親切を生む  
人生の最大幸福は一家の和楽である  
どんな小石でも波紋はひろがる  
勤勉は幸運の母  
美しい笑いは家の中の太陽である  
逢いなき人生は暗黒なり  
不慮に備えて常に明朗に  
仕事を見てその人を知る  
他人を生かせ自分も生きる  
家庭の円満は互いの遠慮から  
天知る地知る我知る人も知る  
心は天国もまた地国も作る(ママ)  
人は善悪の友による

楽は苦のたね 苦は楽の種  
良書は信用すべき良友なり  
積善の家には余愛あり  
時を得る人は万物を得る  
天はみずから助くる者を助く  
一事をおこたる者は万事をおこたる  
悪友の笑顔より善友のおこり顔  
和をもって尊し  
清く正しく強く明るく  
信用は無限の資本なり  
正直の頭に神やどる

笑う門には福来る  
百里の道も一歩から  
心ざしある者は事ついになる (ママ)  
失言は放ちたる矢の如し  
上手なうそより下手な誠

### 謝辞

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の共同研究プロジェクト(K2615)の助成を受けたものです。

### Abstract

Kotaka Otsuma wrote a diary from 24<sup>th</sup> on October in 1965 to 31<sup>st</sup> on October in 1967. This diary represents the later days of her life including her daily events, her human relationships and so on. This also includes actual human relations between living persons, therefore it must not be permitted to open this, and however this is one of the most important materials about her life and thoughts especially in her later life. This work was supported by Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University (Grant Number K2615).

(受付日：2016年1月28日，受理日：2016年2月5日)

真家 和生 (まいえ かずお)

現職：大妻女子大学博物館 教授・学芸員

東京大学大学院理学系研究科博士課程人類学専攻中途退学。

専門は人類学・生理学・博物館学。現在は博物館資料の調査研究を行っている。

主な著書：自然人類学入門 (単著，技報堂出版)